

丹後における黒色土器について

竹原 一彦

1. はじめに

古代末から中世にかけて、畿内地域において日常什器の主流を占めたのは、瓦器と土師器である。なかでも瓦器は、器壁の内外両面を黒色ないし灰黒色に燻焼きしていることから、発掘調査の際には必ずといって良い程目にとまる土器である。瓦器は畿内においては11世紀中葉にあらわれ、15世紀前半までの約400年の間継続して生産している。また、瓦器に先行する段階として、瓦器と同様に燻焼きを行っている黒色土器の存在が知られている。黒色土器は、畿内地域において8世紀中葉以降に生産された土師器の中の一群で、器壁の内面および内外両面を黒色化した土器である。畿内の黒色土器には器壁の内面のみを黒色化するA類と、内外両面を黒色化するB類の2形態が認められる。畿内地域における燻焼土器は、黒色土器A類——黒色土器B類——瓦器への変遷がうかがえる。

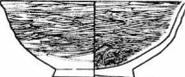
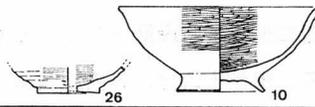
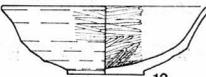
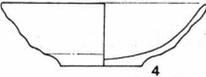
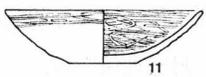
以前から比較的目につきやすい黒色土器は、丹後の各地で表面採集がなされていたが、それらの多くは散発的な出土であり、あまり注意がはらわれることはなかった。その後、^(注1)網野町林遺跡の発掘調査で多量の黒色土器が出土し、ついで^(注2)加悦町中上司遺跡の発掘調査においても、多量の黒色土器が出土したことから、一躍黒色土器に関して注意がはらわれるようになった。両遺跡の調査成果により、丹後地域では11世紀から13世紀にかけて黒色土器の使用が考えられ、黒色土器の中でも代表的な椀においては大きく5段階の形態変化が認められると判断された。^(注3)丹後地域での黒色土器の初現と終末には不明な点が多く、その変遷も不確定である。近年、丹後・丹波地域での諸調査によって、黒色土器を出土する例が増加してきていることから、それらの新資料を加えて、丹後地域における黒色土器の考察を試みてみたい。

2. 丹後地域における黒色土器

丹後地域における黒色土器は、ロクロ整形による土師器の中の一群であり、椀形態においては一部輪高台も認められるが、底部に糸切り痕を残した平高台か平底のものが通例である。黒色土器の器形には代表的な椀と皿の他、小型の無頸壺・耳杯等も少量ながら存在している。各器種の中でも椀の出土が大部分を占め、ついで皿がそれに続く。黒色土器は

丹後地域でも畿内地域の黒色土器と同様に、内面のみを黒色化するものと内外両面とも黒色化するものが認められる。ただ、その黒色化する範囲の相違は、畿内地域でみられた時期差を示すものではなく、丹後地域では内面のみ黒色化するものが全期間を通して出土することから、黒色化の相異は器種による調整の差とみることができよう。丹後地域において内外両面を黒色化するものは、皿等に代表される小型製品のみであり、黒色土器の大部分を占める碗は一部の例外を除き、全て内面のみ黒色化したものである。

丹後地域出土の碗には大型・小型の2種類がある。大型碗は口径14.5～17.3 cm・器高4.2～6.7 cmの法量をもつ。小型碗

第I段階	1型式	
	2型式	
	3型式	
第II段階	1型式	
	2型式	
	3型式	
第III段階	1型式	
	2型式	
	3型式	
第IV段階		

第1図 黒色土器碗形態分類試案

は口径12.5cm前後・器高4cm前後の法量を示すものとみられるが、良好な資料の出土をみないことから、現時点では不明な点が多い。このうち小型碗は全て内外両面を黒色化している。唯一の出土例ではあるが、大型碗の中にも内外両面を黒色化したものも認められる。碗に次ぐ出土量をもつ皿においても、大型・小型の2種類が存在する。器高に関しては両者とも2cm前後であるが、口径は9cm前後と11cm前後の法量をもつ。皿の底部は糸切り痕

を残す平底が通例であるが、2cm前後の高台を有するものも一部存在する。概して大皿は器壁が厚手であり、小皿は薄手のつくりである。大皿には外面の一部に素地の色調を残している例があることから、椀と同様に大型・小型の器種により黒色化範囲の相違があるかも知れない。実見した大皿の資料が少ないため、現時点では不確定である。その他、小型無頸壺・耳杯に関しては出土例がわずかであるため、その詳細については不明な点が多いが、底部は糸切り痕を残し、内外両面とも黒色化して仕上げている。

黒色土器の製作技術に関して言及してみると、底部に糸切り痕跡を残す例が大半を占めることから、ロクロが使用されたことは確実である。黒色土器の中の椀には、粘土紐巻き上げ痕跡を器壁に残した例や、高台部分で剝離した例が認められることから、椀に関しては、粘土紐を巻き上げて大まかな形を作った後、ロクロ回転を利用して整形したものと判断できる。この技法は須恵器の製作技法に通ずるものである。円筒状にした粘土の柱をロクロの芯部分に置き、その上に粘土紐を巻き上げて整形した後、ロクロの回転を利用して調整したものである。これは丹後地域における初現段階の黒色土器椀に、先記した各痕跡の他、体部中央付近に水挽き整形では考えられない段(稜線)が認められることから明らかである。

黒色土器の器壁調整は、ロクロによるナデ調整の後、ヘラミガキと称されるミガキ調整が施される。ミガキ調整技法には、器壁を緻密に仕上げ水分の不透過性を高める機能の他、暗文と称される装飾的な機能とがある。この技法のうち暗文は瓦器において最も特徴的な技法であり、時期差による変化が著しく、その点で瓦器の形式変化を追っていく上で重要な要素の一つでもある。

丹後地域における黒色土器のミガキ調整は、光沢をもった線状をなし、初期のものほど幅も狭く緻密に施されるが、時代が下がるほど幅は広く、それほど密には施さない傾向がうかがえる。瓦器椀にみられる連続圏線ミガキは、黒色土器椀には認められない。黒色土器椀の体部内外面には、全周を数回に分けてミガキ調整を施している。内外両面ともミガキ工具を横方向にジグザグ状に往復させ、ミガキ調整痕は中央部が下方に下がる状況が認められる。内面の身込み部分には一部暗文とみられるラセン状のミガキも存在するが、基本的には暗文と称される装飾の効果を意識して施すことは無かったとみられる。

丹後地域における初現段階の黒色土器椀の胎土は一般に精良であり、土師質を呈するが、後の段階になる程胎土・焼成とも瓦質に近似していく。畿内地域およびその周辺ではすでに瓦器の生産が開始され、また最盛期を迎えている段階でも、丹後地域では黒色土器の使用が継続している。少量ではあるが瓦器の出土例も一部認められるが、畿内地域のように日常什器の主流を占めるには至っていない。それらの瓦器はおおむね12世紀後半～13世紀

前半に納まるものであり、丹波地域(丹波型瓦器碗)からの搬入品とみられる。

3. 丹後地域の黒色土器編年

丹後地域の黒色土器に関しては、従来より各遺跡調査の報告の際、各担当者の見解が示されてきている。中でも代表的な例として高橋美久二氏は、網野町林遺跡調査で黒色土器を畿内周辺地域の「地方色のある瓦器」としてとらえられ、その出現年代を畿内地域で瓦器が出現する11世紀代に置き、終末は13世紀代とみる見解を示された。^(注5) また、杉原和雄氏は加悦町中上司遺跡調査で、近隣地域の資料を加えて林遺跡資料を元に、身の深さ・底部の形の変化から碗を5形態に分類され、平底化したものを12世紀代・下限を13世紀代に納まるとの見解を示された。^(注6) その後の各調査報告においても同様な見解が示されている。^(注7) 現在まで丹後地域における黒色土器の編年が実施されていないのは、黒色土器の出土状況や共伴遺物にめぐまれていないことにある。遺物の編年作業を行うにあたっては、遺物の出土層序や出土遺構の重複関係を考慮することは当然であるが、現時点ではそれらの資料が限定されているため、ここでは黒色土器碗をとりあげ、碗の形態や調整手法の相違を基準として、先学の見解をふまえながら丹後地域の黒色土器の実態を明らかにしていきたい。

丹後地域の黒色土器は、その出現から終末までを大きく4段階に区分し、さらに10型式に細分するのが適当と考えられる(第1図)。以下、各型式について概要を述べる。

第I段階 この段階は丹後地域における黒色土器の初現形態にあたる。深い身をつくる碗の体部中央付近に稜線が認められ、口縁端部は小さく外反して終る。底部は高く突出し、回転糸切り痕を残す。器壁のミガキ調整は、下地のナデ調整痕が見えないほど緻密に施す。口径15cm前後・器高6cm前後であり、器高指数は40前後を示す。胎土は全般に精良であり、焼成は土師質に仕上げ、色調は橙褐色および黄褐色である。この段階の黒色土器は、器形およびミガキ調整の相違から3型式に細分する。

第I段階1型式 第I段階を代表する黒色土器碗である。深い身をつくる体部は、底部から一旦直線的に外方へ開き、体部中央で屈曲して上方へたち上がり、その際明瞭な稜線を器壁に残す。口縁端部は小さく外反して尖がりぎみに終る。八の字状に外方へ強く開く平高台は高さを持ち、ヘラ調整により端部はシャープに尖る。内外両面のミガキ調整は5～6分割で、細く緻密に仕上げる。外面のミガキ調整は体部下端付近にまで施す。この型式の碗は林遺跡出土例のみである。

第I段階2型式 この型式の特徴としては1型式とは若干異なり、口縁部はやや外方へ開くところから、体部中央の稜線が幾分明瞭さを失う。八字状に開く平高台はヘラ調整とナデ調整の様が認められ、端部はシャープに尖る。器壁のミガキ調整は1型式と大差ない。

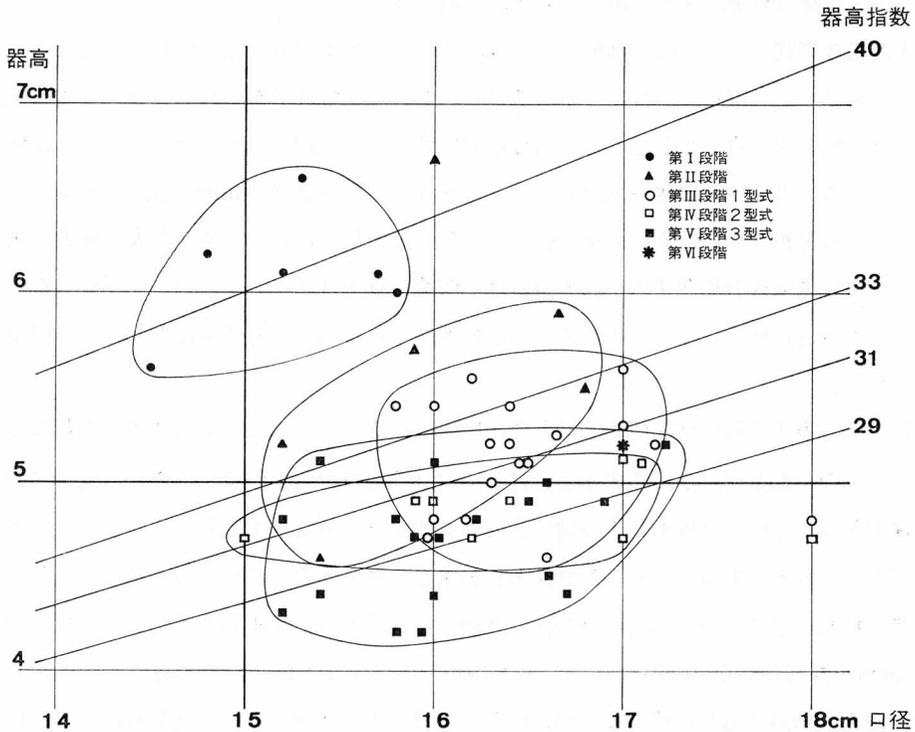
この型式の椀は林遺跡・大宮町正垣遺跡^(注8)出土例がある。

第Ⅰ段階 3 型式 この段階の特徴としては、高台とミガキ調整の点で前述の 2 型式との差違が認められる。高台部分は、その高さの点において変化は認められないが、端部は外方へあまり開かず、直立化して終る。高台部の調整にはヘラ調整とナデ調整の 2 様が認められる。小さく外反する口縁端部は丸く終る。器壁のミガキ調整は 3mm 前後とやや幅広く、緻密さも幾分粗くなり、下地のナデ痕を一部磨き残す例がある。小型椀も大型椀と同様に体部中央付近で幾分屈曲するが、大型椀ほど明瞭な稜線は認められない。小型椀は器壁・胎土とも黒色に仕上げる。この型式の椀は林遺跡・正垣遺跡・丹後町竹野遺跡^(注9)に類例が認められる。

第Ⅱ段階 第Ⅰ段階の椀に認められた体部中央の稜線は、この段階でほぼ認められなくなる。底部の回転糸切り痕を残す平高台は、その高さを減少していく。小さく外反していた口縁端部は、その外反度も第Ⅰ段階に比べ幾分弱まり、外反せずに丸く終るものも認められるようになる。器壁のミガキ調整は密に施すが、磨き残す部分もみられるようになり、器壁を緻密にするという当初の機能は、3 型式段階あたりから失われ始める。口径 15.2～16.8cm・器高 4.3～5.9cm・器高指数 33 前後を示す。第Ⅰ段階に比べて身は浅くなる。全般に胎土は精良であり、焼成はこの段階から瓦質に近い状態となり、色調も淡黄色ないし黄灰色を呈する例が認められるようになる。この段階は器型およびミガキ調整の相違から 3 型式に細分する。

第Ⅱ段階 1 型式 椀の体部は底部から丸味をもってたち上がり、口縁端部は若干外反して丸く終る。回転糸切り痕を残す平高台は直立し、高台高は 3mm 前後で、第Ⅰ段階に比べその高さを減じる。内面のミガキ調整は口縁部においてやや粗くなり、一部ナデ調整痕を磨き残す例も認められる。外面のミガキ調整は体部下半部まで施される。内面身込み部分に、底部外周から口縁部方向にかけて擬ラセン状のミガキを施し、右上りと左上りを組合わせて装飾効果を高めている例も認められる。この型式の椀は野田川町下畑遺跡・加悦町金屋桜内遺跡^(注10)出土資料に代表される。

第Ⅱ段階 2 型式 この型式にあたる平高台をもつ大型椀の良好な資料はみあたらない。器形においては 1 型式とさほど変化は認められないものと推定するが、外面のミガキ調整は体部の上半部で終るものとみられる。類例は少ないが小型椀と輪高台をもつ大型椀が認められる。小型椀は完形資料が得られないため詳細は不明な点が多いが、低めの高台は直立する。体部は底部から丸味をもってたち上がる。外面のミガキ調整は、体部中央付近のやや下部にまで施す。内外両面・胎土とも黒色に仕上げる。輪高台をもつ大型椀は、口径 16.1cm・器高 6.7cm を測る。球形に近い体部は深い身となり、やや肥厚する口縁部は小さく外

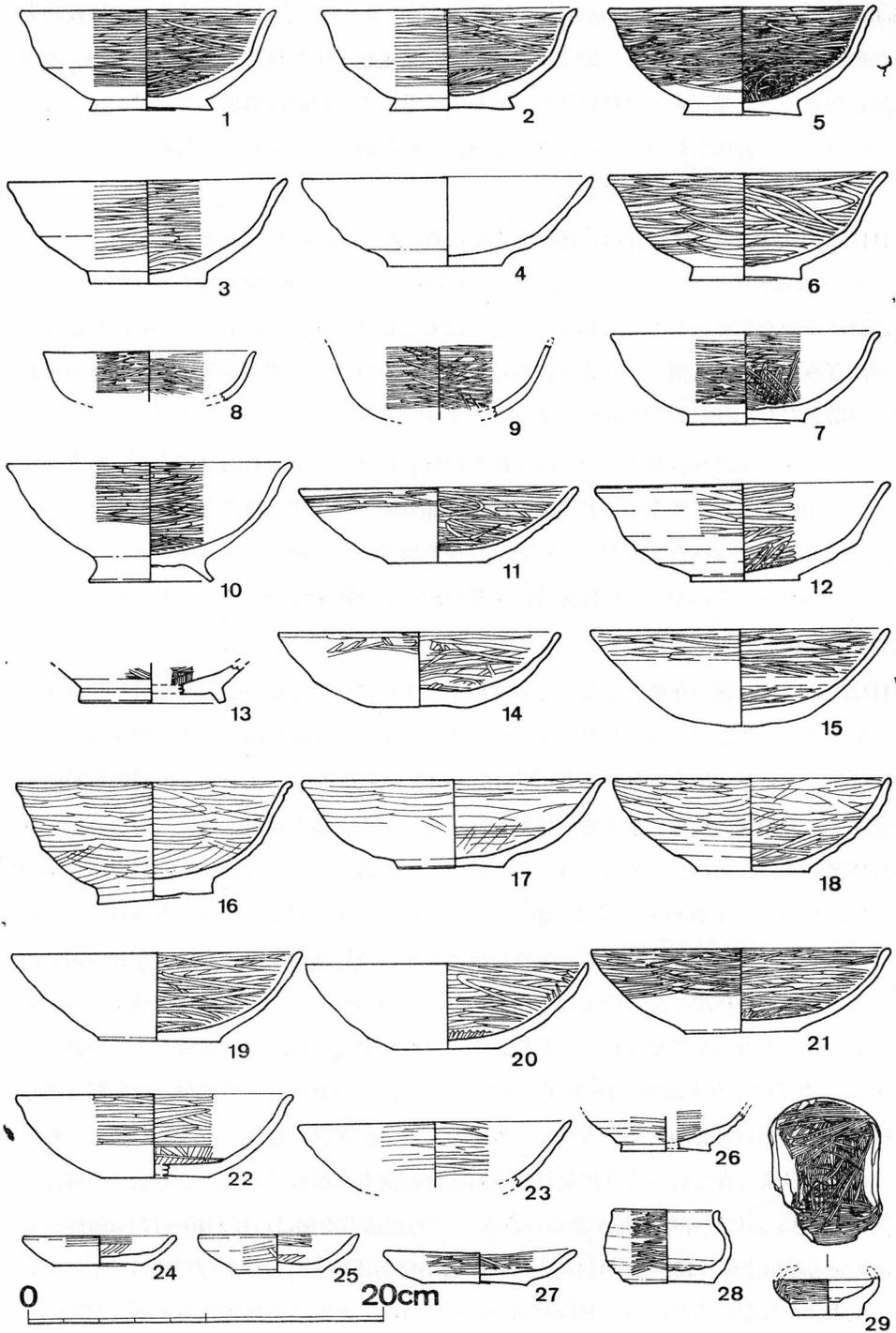


第2図 黒色土器碗計数表

反して丸く終る。底部は強く八の字状に開く高い輪高台を貼付ける。高台内の中央部はヘラ削りを行い、高台貼付けによる壁面の高まりを削り取る。内外両面のミガキ調整は緻密に施し、外面では小型碗と同様、体部中央やや下方にまで施す。胎土は特に精良で、内面は黒色・外面は黄褐色を呈する。この段階の碗は下畑遺跡(注12)に良好な資料が認められる。

第II段階 3型式 この型式の特徴としては、器高に対して口径が大きくなり、体部は下半部から口縁にかけて開きぎみとなる。高台は直立するが、その高さは1型式に比べて一段と低くなる。口縁端部は丸く終るが、小さく外反する例も認められる。内外面のミガキ調整は粗くなり、ナデ調整痕を磨き残す部分が1型式に比べ増加してくる傾向がうかがえる。外面のミガキ調整は上半部分で終る。この型式の碗は宮津市中野遺跡(注13)に代表される。

第III段階 丹後地域では、この段階において黒色土器の出土が飛躍的に増加する。第II段階に引き続き口径は大きくなり、器高はさらに低くなる傾向が著しく、器形は浅い身を呈するようになる。口縁部はやや内湾ぎみとなる例が増えてくるが、少数ではあるが外反する例も認められる。体部の内外両面のミガキ調整は、一段と粗略化傾向を増してくる。この段階では顕著な平高台は認められなくなり、平底化していく段階でもある。碗の口径は



第3図 丹後出土の黒色土器

1~4: 林遺跡, 5~9: 正垣遺跡, 10・11・26~28: 下畑遺跡, 12~15: 中野遺跡,
 16~18: 竹野遺跡, 19・20・23~25: 三宅遺跡, 21: 後正寺古墓, 22: 中上司遺跡,
 29: 枝ノ鼻遺跡

15. 0~17. 2cm・器高4. 2~5. 9cmの中に含まれる例が大多数を占める。胎土には比較的大きな砂粒が目立つようになる。焼成は瓦質で、淡黄褐色・灰褐色を呈する例が多い。内面は黒色化するが、光沢をもたない例が増加してくる。この段階は黒色土器の量産化が計られ、それに伴い製作が粗略化する段階である。この段階の黒色土器は、器形およびミガキ調整の相違から3型式に細分できる。

第III段階 1 型式 前段階に比べ口径は大きくなり、器高は減少する。口径15. 8~17. 2cm・器高4. 6~5. 6cmの範囲に集中する傾向が認められる。器高指数は31前後を示す例が多い。体部はゆるやかな丸味をもちながら外上方へたち上がり、口縁部はやや肥厚し、端部は幾分内湾ぎみに丸く終る例と外反ぎみに終る例が認められる。底部は高台が顕著に認められない段階となり、底面より2mm前後上部にアクセントをもつ平底に近い平高台をもつ。体部の内外両面には比較幅の広いミガキ調整が施されるが、その間隔は広まり、磨き残す部分が増加してくる。外面のミガキ調整は上半部分のみに施す。輪高台をもつ椀は、第II段階 2 型式例と比べ高台も減じ、高台も厚味を増す。外面のミガキ調整を下半にまで施す例もみられる。この型式の椀は林遺跡・網野町三宅遺跡^(注14)・竹野遺跡・中野遺跡出土例に代表される。

第III段階 2 型式 椀の体部と器壁のミガキ調整は1型式と大差ないが、底部は体部下端を強く横ナデすることにより、なだらかな側面をもつ平高台を作り出す。この型式の底部径は7cm前後と大きくなる傾向を示す。口径15. 0~18cm・器高4. 7~5. 1cm・器高指数29前後を示す。この型式の椀は三宅遺跡・竹野遺跡・野田川町高浪古墳出土例^(注15)に代表される。

第III段階 3 型式 器高は前型式よりさらに低減化を進める。椀の身は浅く、最も浅い例は口径15. 9cm・器高4. 2cm・器高指数26である。体部の丸味は弱くなり外上方へ延びる。口縁端部はやや内湾ぎみに丸く終る。少数ではあるが、口縁端部を小さく外反させる例も認められる。器壁を極端に薄く仕上げる例もあり、その結果、いびつな器形を呈するものも認められる。底部は完全に平底化し、回転糸切り痕を残す底径は、5cm前後と小さい例が増加する。内面のミガキ調整は4~5mmと幅広く、身込み部分は密に施すが、口縁部は間隔も粗く、ナデ調整痕を随所に磨き残す。外面のミガキ調整は口縁部にのみ粗く施す。胎土には砂粒が多量に含まれるようになり、小石を含む例も増加してくる。この型式の椀は三宅遺跡・下畑遺跡^(注16)に良好な資料が認められる。三宅遺跡出土例は口径が16~17cm前後を示し、下畑遺跡出土例は15~16cm前後と口径の縮小化が認められる例も存在する。光沢をもつミガキ調整は認められない。下畑遺跡の井戸から椀とともに小型無頸壺・小皿が共伴している。小型無頸壺は、体部中央やや下部に最大幅をもつ。平底の底面には回転糸切り痕を残す。ミガキ調整は外面にのみ施す。ミガキ調整痕の幅は細いが、緻密さには欠ける。

胎土および内外両面は黒色化し、ミガキ調整部分は光沢をもつ。

第Ⅳ段階 この段階は、丹後地域における黒色土器の最終段階に相当する。第Ⅰ段階から継続して認められてきた底部の糸切り痕は、この段階では認められず、底部は丸底化する。丸味をもつ身部はやや深身となる。口縁部はやや肥厚させ、端部は丸く終る。内外両面のミガキ調整は、省略化が一段と著しくなる。この型式の資料は、中野遺跡出土の^(注17)1例だけである。

以上丹後地域出土の黒色土器を4段階10型式に分け、その形態分類を行ってきたが、ここで黒色土器の年代についてふれてみたい。丹後地域における第Ⅰ段階の黒色土器は、胎土・焼成とも土師質であり、第Ⅱ段階以降の黒色土器は瓦器に近く、形態・法量からみても第Ⅰ段階と第Ⅱ段階の間には歴然とした差違が認められる。畿内地方で瓦器が出現する段階と丹後地域の第Ⅱ段階とを同列に置くことができるならば、第Ⅰ段階の黒色土器はほぼ11世紀前半代におくことができよう。また、中上司遺跡では黒色土器碗が緑釉陶器と共伴し、各地の調査でも緑釉陶器が伴出する例もあることから、この年代観は妥当性をもつものとみる。第Ⅱ段階の黒色土器と畿内地域で瓦器の出現をみる11世紀中頃以降と同列に置くことができよう。第Ⅲ段階はおおむね12世紀代の年代を与えることができる。2型式段階は、近隣の丹波地域福知山市後正寺古墓出土例において、丹後地域と類似する黒色土器碗が瓦器碗・須恵器鉢と共伴し、それらの年代観は12世紀代を示している。また、丹後町上野遺跡出土の一括資料・高浪古墳出土の一括資料も、同様な年代観を示す。^(注19)3型式段階は、林遺跡3区ピット5の一括資料・三宅遺跡L3区出土一括資料から、ほぼ12世紀後半～13世紀初頭の年代観を得ている。第Ⅳ段階は、ほぼ13世紀前半代に相当するとみられる。^(注20)

以上、丹後地域出土の黒色土器の年代観を述べてきた。不確定な要素が多分に残るが、ここでは、第Ⅰ段階を10世紀末～11世紀前半、第Ⅱ段階は11世紀後半～12世紀初頭、第Ⅲ段階は12世紀前半～13世紀初頭、第Ⅳ段階は13世紀前半と考えておきたい。

4. 結 語

以上、平安時代後半から鎌倉時代前半にかけて丹後地域に広く分布する黒色土器について、その形態および器壁調整の変遷からみた編年を試みてきた。その結果、丹後地域の黒色土器を中心とする土器は、近隣地域の土器とは明らかに異なる様相を示している状況が判明した。丹後地域の黒色土器の特徴としては、糸切り底の底部をもち内面のみ黒色化する点に代表される。また、黒色土器は時期が下がるにしたがって、その碗の法量は減少する傾向がみてとれる。畿内および周辺地域で認められる瓦器の出土は、丹後地域において

は少数例しか認められない。また、このような土器の様相は隣接する但馬・近江の両地域においても同様な様相が認められる。

但馬地域では、丹後地域に分布する黒色土器碗と同様な形態をもつ土師器碗の分布が認められるが、黒色土器および瓦器の出土はあまり認められない。また、近江地域では9世紀代～14世紀代にわたる長期間、内面を黒色化する黒色土器が分布している。瓦器碗の出土がほとんどみられない点は丹後地域と同様であるが、黒色土器碗の形態および製作技法は大きく異なる。近江地域の黒色土器に関して野洲町教育委員会の森隆氏は、黒色土器の初現を10世紀代、終末を14世紀代に位置づけられ、「近江型」と呼ばれる畿内地域の瓦器に強い影響を受けた黒色土器の成立は、11世紀末～12世紀初頭に位置づけられた^(注21)。丹波地域では瓦器が盛行したとみられ、初現段階の瓦器碗は「楠葉型」の影響を強く受けて12世紀代に成立し、その後「丹波型」と呼ばれる独自の瓦器碗が出現し、その終末は14世紀代に位置づけられている^(注22)。なお、丹波地域の北部では福知山市の後正寺古墓・城ノ尾古墳^(注23)・綾部市青野南遺跡^(注24)で丹後のな糸切り底をもつ黒色土器碗が出土しているが、外面のミガキ調整は丹後地域の様相と異なり、丹後地域からの搬入品では無く独自の黒色土器とみられることから、丹波地域での瓦器の先行段階とみることができるかも知れない。このように丹後地域の周辺ではそれぞれ異なる土器の分布が認められ、丹後地域でも独自の土器の分布があることから、各地域毎に異なった土器の生産・流通機構が存在したとみることができよう。

畿内地域では9世紀以降須恵器の生産は衰退の方向をたどり、また、土師器は技法の簡略化と量産化を図ったとみられ、その結果、粗悪化の方向をたどっている。また、この時期に土師器の粗悪化とは対照的に、複雑な生産工程をもち品質の向上をめざした黒色土器A類が生産され始める。これは土師器工人が分離してそれぞれ独自の生産を開始したためとみることができ、黒色土器工人はやがて瓦器の生産へ移ったものと判断される。同時期、須恵器の中で中国陶磁を模倣した灰釉・緑釉といった施釉陶器が生産され始める。灰釉陶器は尾張地方、緑釉陶器は平安京周辺(丹波・山城・近江地域)と東海地方(尾張・美濃地域)で中心的に生産されたことが知られ、その製品は平安京以外の地域にも広く流通していたことが判明している。丹後地域の黒色土器碗はこの施釉陶器の中でも緑釉陶器の影響を強く受けていることは、その形態・技法の上からも明らかである。

丹後地域において盛行する黒色土器と土師器の碗・皿は、ロクロ整形・糸切り等同一の製作技法・形態をもつ。巽淳一郎氏によれば、粘土紐巻き上げロクロ整形は須恵器製作の技法であり、9世紀以降衰退をたどる須恵器生産はそれまで律令制の中で強い規制を受けていたが、律令制の崩壊過程の中で窯業生産者集団の統合が行われ、須恵器工人も土師器

の生産を行ったと考えられた。^(注25)それに伴い粘土紐巻き上げロクロ整形を行う土師器の製品が各地で認められるようになったとみられる。須恵器生産以上に規制を受けていた施釉陶器も、窯業生産体制の編成の中で規制を離れたとみられ、11世紀中葉以降その生産を停止する緑釉陶器工人は、それぞれ他の窯業生産に従事していったものとみられる。

平安京周辺で9世紀以降も須恵器の生産を続けていたのは丹波地域の亀岡市篠窯跡群^(注26)だけであり、一部窯跡では緑釉陶器の生産も行っている。篠窯跡における緑釉陶器の生産はほぼ10世紀中葉段階に位置づけられ、その後、緑釉陶器の技法は途絶えている。丹後地域の須恵器工人が篠窯跡等における緑釉陶器製作技法をいち早く取り入れ、黒色土器碗の生産を開始していったことは十分予想されるところである。丹後地域で須恵器を生産していた窯跡は、現在中郡の4窯跡^(注27)だけである。峰山町の吉原窯跡^(注28)・大河原窯跡^(注29)の2窯跡、大宮町の阿婆田窯跡^(注30)・新宮窯跡^(注31)の計4窯跡である。これらの窯跡はおおむね7世紀後半～9世紀代に属するとみられている。この窯跡の須恵器工人が土師器生産を開始し、さらには黒色土器の生産を手掛けたとみることもできよう。

丹後地域における黒色土器の終末に関しては、現在の段階では不明な点が多い。多くの場合、それまでの土器に取って替わる土器の出現をみる例が多いが、丹後地域においては、黒色土器が盛行した12世紀～13世紀初頭段階以降、黒色土器の出土は急激にみられなくなるが、須恵器の技法を受け継ぐ地方色ある土師器の生産は途絶えることなく生産されている。下畑遺跡第2次調査における井戸内からは、第Ⅲ段階3型式の黒色土器碗包含層の直上層^(注32)で黒漆を塗付した木器碗4点・皿1点が一括出土している。木器資料の性質上出土例は少ないが、漆器碗の出土する例が丹後各地で散見できることから、黒色土器に代わる日常什器に木製碗が使用されたとみることもできよう。

以上、やや粗雑な考察に終始したが、一応丹後地域における黒色土器の系譜と変遷についておおよその見通しを述べた。丹後地域では今後、遺跡の発掘調査件数が増加するのは確実であり、他の遺物との共伴関係を押さえ、黒色土器を含む古代末期～中世にかけての土器群の編年をより確実なものとしていくのが今後の課題である。

今回、文中に記さなかったが、野田川町教育委員会の後藤公一氏の御好意により、黒色土器の耳杯を掲載することができた(第3図29)。この耳杯は枝ノ鼻遺跡出土資料であり、第Ⅰ段階3型式～第Ⅱ段階2型式の間に位置づけられよう。

また、林遺跡・三宅遺跡出土資料の実見・実測にあたっては網野町教育委員会の三浦到氏のお世話になった。中野遺跡出土資料の実見に際しては宮津市教育委員会の中嶋陽太郎氏から御教示を得た。さらに本稿執筆にあたっては(財)京都市埋蔵文化財研究所の吉村正親氏、当調査研究センターの杉原和雄氏・水谷寿克氏・辻本和美氏に教示を得た。ここに

記して感謝いたします。

(竹原一彦 = 当センター調査課調査員)

- 注1 高橋美久二・三浦到ほか「林遺跡発掘調査報告書」(『網野町文化財調査報告』第1集 網野町教育委員会) 1977
- 注2 杉原和雄ほか「中上司遺跡発掘調査報告書」(『京都府加悦町文化財調査報告』第2集 加悦町教育委員会) 1979
- 注3 注2に同じ
- 注4 丹後地域では林遺跡・古殿遺跡その他各地より少量ではあるが、瓦器椀・瓦器皿の出土をみている。ただ、宮津市中野遺跡調査例では中世陶磁器とともに100片以上にのぼる多量の瓦器の出土をみるが、このような例は丹後地域ではまれである。
- 注5 注1に同じ
- 注6 注2に同じ
- 注7 平良泰久氏は、丹後町竹野遺跡調査において第Ⅲ段階の黒色土器を12世紀中葉～13世紀代に置く見解を示される。また中嶋陽太郎氏は、第Ⅳ段階の黒色土器を中野遺跡出土資料をもとに13世紀前半代とみられている。
- 注8 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センターにより、大宮町で現在も府宮ほ場整備事業に伴う発掘調査を実施中であり、詳細は調査終了後の報告に譲る。
- 注9 平良泰久ほか「竹野遺跡」(『京都府丹後町文化財調査報告』第2集 丹後町教育委員会) 1983
- 注10 今回の資料は、下畑遺跡第3次発掘調査出土資料である。現在、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターにより整理報告作業中であり、詳細は昭和60年度の報告に譲る。
- 注11 久保哲正・佐藤晃一「加悦地区圃場整備事業関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1983
- 注12 注10に同じ
- 注13 中嶋陽太郎・杉原和雄ほか「中野遺跡第2次発掘調査概要」(『宮津市文化財調査報告』3 宮津市教育委員会) 1981
- 注14 三浦到ほか「三宅遺跡第1次発掘調査概要」(『京都府網野町文化財調査報告』第3集 網野町教育委員会) 1985
- 注15 久保哲正・波多野徹「高浪古墳発掘調査概報」(『京都府野田川町文化財調査報告』第1集 野田川町教育委員会) 1985
- 注16 竹原一彦「下畑遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡発掘調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注17 中嶋陽太郎ほか「中野遺跡第3次発掘調査概要」(『宮津市文化財調査報告』5 宮津市教育委員会) 1982
- 注18 岩松 保ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注19 注2に同じ
- 注20 宮津市教育委員会の中嶋陽太郎氏に御教示を得た。
- 注21 森 隆氏は1985年第4回中世土器研究集会において、近江の湖南地域を中心とした黒色土器についての見解を示されている。
- 注22 石井清司・引原茂治・伊野近富「亀岡盆地出土の瓦器について」(『京都考古』第37号 京都考古刊行会) 1985

- 注23 辻本和美・石井清司ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』第2分冊 京都府教育委員会) 1981
- 注24 中村孝行「青野南遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 注25 巽淳一郎「古代窯業生産の展開」(『文化財論叢一奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集一』 同朋舎出版) 1983
- 注26 安藤信策・吉水真彦・樋口隆久「国道9号バイパス関係遺跡昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会) 1978
- 注27 杉原和雄「新宮窯跡発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会) 1974
- 注28 7世紀後半頃とみられ、出土遺物には壺と甕がある。
- 注29 およそ8世紀前後～9世紀初頭に比定されている。出土遺物には杯身・蓋・椀・壺・甕がある。
- 注30 8世紀後半頃とみられる。出土遺物には杯身・蓋・壺・甕・すり鉢がある。
- 注31 7世紀中頃～後半に比定される。出土遺物には杯身・蓋・高杯・椀・甕等がある。
- 注32 注16に同じ